見えない世界の住人たち—『夏の夜の夢』論

英米文学教室　岡　村　俊　明

バターを作ろうと牛乳をかきまわしても作れない場合がある。エイル（麦芽酒）を発酵させようとしても発酵しない場合がある。手引き臼で穀物をひこうとしてもひけない場合がある。新鮮な牛乳もクリーム（上皮）がなくなり，牛乳の味が希薄となってしまう場合がある。

これらは百姓のおかみさんの家内労働であるが，どの場合も無駄骨になった例である。

田舎家で見られる次のような小さな事件もある。

酒杯にはいったエイルを飲もうとするとき，焼き林檎が酒杯から飛び出してきて，飲んでいたばあさんのぺしゃんこの乳房に，エイルがかかるときがある。また，三脚椅子にすわろうと思って，そこに何もなかった場合，すわろうとしたばあさんは，ひっくりかえってしまい，まわりのひとびとの哄笑をまねくことになる。

また田舎家の外での出来事もある。何ものかが近くにおり，村の若い娘たちをこわがらせる。あるいは，村の夜道を気持ちよく歩いていた若者も，いつまでたっても，家に帰りつけなくなる場合がある。

同じ田舎家の外でも，人間の若い男女ばかりでなく，動物の雌雄の世界の出来事もある。肥えて元気のよい若い雄馬の近くに，雌馬をはなしてやったとすればどうなるのか。いや，現実の雌馬ならまだいいとして，それが何か架空のものであれば，元気のよい雄馬は相手を見失ってうろたえるのは必定である。

こういう失敗はすべては行為者の責任—人間の責任であり，動物の責任である。しかしこういういたづらを引き起こしている，目に見えないものの存在があるとすればどうなるのか。この答は後回しにして，次のことも考えてみよう。

季節の異変がある場合がある。真っ白な霜が咲いたばかりの真っ赤な薔薇の上に降り，「冬」じいさんの禿頭に夏の日のつぼみが咲きこぼれることがある。あるいは，春も夏も，実りの秋もきびしい冬も，いつもの装いを変えてしまい，あげくのはては，それぞれの季節のものを見ただけでは，私たちはどれがどれやら見当がつかないというときがある。

季節の異変ばかりでなく，それをも含めた大きい自然界の異変がある場合もある。例えば，海からたちのぼった霧が大地に降り，そのため小川は岸を乗り越えてあふれだす。あるいは，潮の干満を司る月が青白く，不気味なほど青白くなり，大気に水気がみなぎり，その湿気のため病気がまんえんするようなことがある。

自然の異変は，必然的に，人間界に異変を引き起こす。

牛がすきを引いても，また百姓が汗水たらして働いても，実りの秋も迎えずに麦はくさってしま

う。野原が一面水浸しになったため，おりにいれられた羊も死んでしまい，その羊の死骸をからすが食うことがある。

そういうこともあって，人々は冬の楽しみもおもうにまかせず，賛美歌やキャロルを歌って過ごすことができない。このようにして，季節の異変，自然の異変は，春から秋にかけての人々の労働を無駄にし，労働の果実から成り立つ冬の楽しみの基盤を失わせてしまうことになる。

これまで述べてきたことを大別すれば，田舎家をとりまく小さな事件と人間界をとりまく異変ということになろう。前者は人間（あるいは動物）が注意すれば，失敗とはならずにすむものであろう。後者ならば，その異変は，防げないまでも，今日ならば，その被害を減少でき，その原因を科学的に説明できるものであろう。

それが，シェイクスピアの『夏の夜の夢』ではまったくちがっている。前者は妖精パックが引き起こしたものであり，後者は妖精の王オベロンと妖精の女王タイタニアの喧嘩が引き起こしたものとなっている。

ではパックとは一体なにものかといえば，元来英国中世伝承の悪鬼，あるいは悪い妖精であった。しかしこの作品では，ロビン・グッドフェロウ又はホブゴブリンとも呼ばれており，例えば，ロビン・グッドフェロウとは，人間には害のない楽しいいたづらをする妖精である。

ということは，シェイクスピアは，悪い妖精パックから，おどろおどろしい，不気味なイメージをすっかり取り払い，このような罪の無いいたづらをさせているのである。

では，オベロンとタイタニアはどういう妖精なのか。彼らは本来，英国民間伝承には知られていなかった妖精であるが，シェイクスピアはギリシャのオヴィドやシェイクスピアの同時代人ロバート・グリーンなどの作品からヒントをえて，超自然的な力をもつ妖精の王及び女王としている。

こういう田舎家をとりまく小さな事件や，人間界をとりまく異変を起こしたといわれている妖精達は，この劇に登場する人間達とも交流することになる。

妖精は本来肉体を持たない存在であるが，ここでは肉体をもって舞台に登場する。彼らは登場人物には見えないが，観客には見える―こういう意味で二重構造となっており，この二重構造がこの劇では重要である。

なぜならば，妖精達が登場人物にも観客にも見えない存在であるならば，ごく普通の民間伝承となり，なんら面白味がない。彼らが登場人物には見えない存在であり続けながら，観客には見えるということで，登場人物の心理現象と彼らに対する妖精の働きを観客は具象的に理解することができるのである。

妖精たちは，小さな事件にしろ，大きな自然の異変にしろ，どちらも超自然力を行使していることが伝えられるが，実際には，彼らはこの劇ではこういう事件や異変を引き起こさない。ただ，彼らは人間にあることをするだけである。

それは何だろうか。人間のまぶたに惚れ薬をぬり，目がさめたとき最初に見た人を恋させるのである。

妖精の超自然的特性をもってすれば，惚れ薬という具象的な薬剤は不必要ではないかと思われる。

その惚れ薬の働きをさらに考えてみよう。

『夏の夜の夢』は，アセンズの公爵シーシュースとその婚約者ヒポリタ，ライサンダーとその恋人ハーミア，ディミートリアスと彼がかって愛したヘレナを中心とする宮廷の世界と，クインス，ボトム，スナッグを中心とするアセンズの職人達の世界から成り立っている。

そして彼ら人間（登場人物）には見えないパックと妖精達の世界もある。

ここでは，宮廷の世界の人間関係が複雑である。ライサンダーはハーミアを愛しており，ハーミアもライサンダーを愛している。二人は相思相愛である。これだけなら問題ないが，ハーミアの父イージーアスは，ハーミアの夫をディミートリアスと定めており，しかもディミートリアスもハーミアを愛している。ハーミアを二人の男が愛している，いわゆる三角関係の愛の構図となっているのである。

そのハーミアを愛していた二人の男が，突如として，それまで顧みなかったヘレナを愛すことになる。

こんなことがあるのだろうか。種明かしをすれば簡単である。パックが間違って，ライサンダーとディミートリアスのまぶたに惚れ薬をぬり，彼らがねむりからさめて最初に見たヘレナを愛すことになったのである。

根がいたづら好きのパックだからこのような間違いをしても不思議ではないのだが，もしパックがディミートリアスだけのまぶたに惚れ薬をぬっていれば，彼がヘレナを愛すことになり，問題はなかったことになる。あるいは，パックが間違ってライサンダーのまぶたに惚れ薬とぬったとしても，ライサンダーがもっとハーミアの近くに寝ており，彼が起きたときに，ヘレナではなくて，ハーミアを見ていたとすれば，以前のように彼はハーミアを愛していることだろう。

このようなパックの直接，間接の間違いが，この劇の恋人たちの関係を複雑にしている。パックの間違いによるこういうもつれがなかった劇を想定してみるならば，たしかに，それは単調で異質な劇になることであろう。

ともかく，二人の男たちは突然に心変わりをし，私たち観客は，パックと妖精達の姿を見ることができるために，男たちの心変わりを容易に理解することができる。

では，その種明かしを見せられている私たちは，突如とした，奇異な恋人たちの心変わりを，喜劇的に理解することができるが，もし妖精達が，私たち観客には見えない存在であり，惚れ薬の介在がなかったとすれば，恋人たちのそのような心変わりは，不自然なことだろうか。

人間の心理現象は不可解な要素から成り立っているものである。実際のところ，私たちは愛したり，憎みあったりするが，いつもそうではなく，徐々に，あるいは突然に，これまで憎んでいた人を愛したり，またはその逆もある。心は変化もするのである。要は，私たちの心は変化の作用を受けるとはいえ，現代的にいえば，私たちの責任で変化するのである。

いくらかの例を引き合いにだしながら，惚れ薬の介在のない恋人たちの心変わりについて考えてみよう。

『ロミオとジュリエット』では，ロミオはロザリンドにかなわぬ想いを捧げていた。彼はそのロザリンドを一目みるために，キャプレット家の宴席に出かけ，一目見てジュリエットを激しく愛すようになる。それ以来これまで愛していたロザリンドのことを彼は一言も言わなくなる。ロミオは，突如として心変わりをして，ジュリエットを愛すようになったのだ。

もし妖精が登場し，ロミオに惚れ薬をぬり，そのためロミオが突如としてジュリエットを愛すようになっていたら，私たちはその種明かしが分かり，『夏の夜の夢』と同じように，腹を抱えて笑うことだろう。

『お気に召すまま』では心変わりの一種ともいえる，一目惚れの恋が扱われている。オリヴァーはシーリアを一目見て好きになってしまう。二人の出合いは，ロザリンドの語るところによると，つぎのようになっている。

あんなにだしぬけなことったら，牡牛同士のけんかか，シーザーの「来

た，見た，勝った」という高言じゃあるまいし。だって，君の兄さんと僕の妹とは出会ったかと思うと見つめた，見つめたと思うと恋をして，恋をしたかと思うと，ため息をした，ため息をしたかと思うと，おたがいその訳を尋ねあい，訳が分かったと思うと，解決法を求めあい，そういった段取りで，結婚への階段をつくってしまって，それをひたすら駆け昇る。でないと，結婚前にひたすらひどいことをしかねない。二人は恋の狂気にとりつかれて，いっしょになろうときめている。棍棒でも引き離しはできない。（5幕2場）（私訳，以下同じ）

ともかく，一目惚れの恋とはこういうものではなかろうか。他の作品にも多くの一目惚れの恋人たちがいるが，この種の突飛さがある。

私たちが早送りのテープを聞くように，彼らは突如として恋をする。一目惚れの恋はどれも不自然といえば，不自然といえる。逆説的に言えば，不自然であることが自然なのである。

では，恋人たちの突然の心変わりが心理的に理解される以上，それを引き起こす妖精の惚れ薬は不要ではないかということになる。実際，それは不要なのである。しかし，恋人たちの心理は説明できても，劇そのものは大きく変わることになるだろう。

では，それがない『夏の夜の夢』を考えてみよう。

なかった場合，劇作りの次の三つのことが目につくだろう。

その第一は，恋人たちの心変わりは，結論としては不自然ではないとしても，それを心理的に不自然ではないと観客に理解させる別の手立てが必要であろう。例えば，『ロミオとジュリエット』では，他の要素（または人）を取るに足らないものだと考えさせるような，ジュリエットにたいするロミオの強い情熱的な愛などである。この劇でもそれを補うことはできるが，そうなれば喜劇の恋としては不適となるだろう。

第二は，妖精が惚れ薬を使わずに，その超自然的な力で，恋人たちを心変わりさせることが考えられる。しかしその場合は，惚れ薬のような，具象的な分かりやすさがなく，その心変わりが引き起こすはずの喜劇感の欠如が目につくことだろう。

第三は，惚れ薬に似たものを人間が用いて，恋人たちのまぶたにぬることが考えられる。しかし，人間には妖精の神秘的な力がないため，その薬剤の効果も半減し，妖精自身が与える惚れ薬の強力な速効性は期待できないことになる。

結論として，妖精の惚れ薬はなくともよいが，なければこの劇は違った種類のものとならざるをえないことになる。楽しくて，爽やかで，さまざまな法則，呪縛からとき放たれた解放感，爽やかな季節に見た楽しい夢の喜劇感が，この劇から消えてしまうことだろう。

そういう意味で，この劇には妖精の惚れ薬は再び必要となってくる。

登場人物には見えない存在である妖精が，観客には見え，その妖精が登場人物に働きかけるために，彼らの心が変化するさまが，私たちには面白いように分かるのである。人間の心理現象，特に愛という不可思議な現象の変化が，ここでは具象的に喜劇的に表現されていることになる。これこそがこの劇の根幹であろう。

しかし，次のような問題もある。

恋人達の突然の心変わりはこのように理解できるとしても，ろばの頭をのせられたボトムをどのように理解すればよいのだろうか。

パックがボトムにろばの頭をのせる。ろばの頭をのせられたボトムは，ろばのような人（馬鹿）

となり，妖精の女王タイタニアに愛される。比喩を介して，ボトムはろば人間となり，その人間に許された異界にはいることになる。

ボトムは異界にはいって，妖精達を直接見ることができ，直接話すことができることとなる。彼は異界の住人となっているのである。

ボトムは妖精と同次元の存在となったが，これは比喩だけでは説明できない。オベロンとタイタニアも妖精であり，超自然の存在である。超自然力を持つたものが，同じ超自然力を持ったものに，人間がなされるのと同じ惚れ薬で，ボトムに恋をさせるのは，パックがライサンダーにしたこととは異質である。後者は人間の心理現象ともそごをきたすことはないが，前者はそうではない。異次元の住人が人間に恋をするという異次元の世界の出来事である。

現実的な言葉を使って表現すれば，ボトムは愚かな人間にのみ許されたろば人間となって，現実世界では不可能なことが可能となる夢の世界にはいったことになる。その夢を表現する言葉は，夢からさめてもとの人間世界に帰ってきたボトムが，愚かな男にふさわしい支離滅裂な言葉でしか表現できないものである。

> おれはまったく妙なものを見た。おれの見た夢はどんな夢か人間の知恵ではとてもいえないものだ。これを説明しょうとするやつはバカだ，いやロバだ。たしかおれは―おれが経験したようなことをいえるやつがいるものか。たしかおれは―たしかおれの頭に―しかしまてよ，おれの頭にのっていたものがなんだったかいおうとするやつは阿呆だ。人間の目が聞いたこともない，人間の耳が見たこともない，人間の舌が考えたこともない，人間の心がしゃべったことのないもの―おれの夢ってそんなものだったなあ。(4幕1場)

このようにして，この劇では恋人たちの突然の心変わりと妖精の女王とのボトムの不思議な体験がいきいきと描かれている。

そして最終幕では，これら二種の出来事に最後の解決が与えられている。

ヒポリタが「あの若い恋人たちの話しはほんとうに不思議ですね」と尋ね，それにたいしてシーシュースは次のように答えるからである。

> 本当とは思えぬほど不思議な話だ。こんな奇想天外な話，こんな他愛もない話は，信じられないほどだ。恋人たちと狂人は熱っぽい頭をもち，ものを作り出す想像力をもっている。そのために，冷静な理性では考えつかないようなことを思いつくのだ。狂人と恋人と詩人は想像力でこりかたまっている。巨大な地獄からはみでるほど多くの悪霊を見る，それが狂人だ。それに劣らず狂気にかられる恋人は，ジプシー女の顔に絶世の美女ヘレンを見る。詩人の目は霊妙なる狂気でまわりまわり，天から地へ，地から天へと視線を移す。そして，想像の力は未知の事物の形を作り出すにつれ，詩人のペンはそれらのものに形をあたえ，ありもせぬ空気に等しいものに，その場所と名前を与える。強烈の想像力はこのような魔力をもっているので，何か喜びを思いつくだけで，想像の力はたちまちその喜びをもたらすものを知る。あるいは，夜中になにか恐ろしいのを想像するだけで，簡単に草むらが熊にも見えてくるのだ。(5幕1場)

恋人は狂人に等しいことになる。冷静な理性では考えつかないことをするからである。そしてこの恋人の心の動きは，詩人の想像力と結びつけられている。

霊感をえた詩人の想像力は，未知のものにも形を与え，どんな不可思議なものも作り出してしまうことになる。この劇の恋人たちやボトムの異界での体験を作りだしたものも詩人の想像力である。

詩人の想像力が作りだした妖精は，別な役割をになっていることが劇の最後で分かってくる。

パックは，

> 私たち影のごときものが，皆様のご満足にかないませんときは，これらの幻が現れておりましたあいだ，皆様が，ただしばらくまどろまれた，と思っていただければありがたいことです。このつまらない，たわいのない話は，ただ一時の夢のようなものでございますので，皆様のおとがめだてがなければと存じます。もしお許しいただけましたら，私たちこんごは改めるつもりでございます。（5幕1場）

これはきわめて重要な意味をもつ最後の台詞ということになる。

第一は，ボトムは夢をみてきたが，一人ボトムばかりでなく，この芝居を見ている観客すべてが夢を見てきた，という構図を提供してきたことになる。

第二は，アセンズの職人たちの劇中劇の演技ばかりでなく，役者すべての演技のつたなさにたいして，パックがかわって観客に詫びており，観客が批評家としてこれを許すという構図を提供しているのである。

第三は，妖精は影のように実体がなく，見えない存在といいながらも，現実の人間の影(shadow)と言う意味で，役者であることを示しているのである。役者とは現実の人間やこの世の出来事を舞台にのせる虚構の存在であるが，これこそ現実である。また妖精も虚構の存在でありながら，現実の存在である。

最後の台詞で，異界の住人達の出来事は，演劇的に見事に解決されている。そしてこの言葉は，シェイクスピアがいう，

> どんな芝居も要するに人生を映す影にすぎない。（5幕1場）

と呼応している。

（1993年4月20日受理）